【曲目解説】

フレデリック・ディーリアス（1862・1・29～1934・6・10）は、裕福な羊毛商人の父ジュリアスと母エリーズの14人の子供の第四子として、イギリス北部ヨークシァに生まれました。両親は共にイギリスへ移住してきたドイツ人です。彼は幼少からヴァイオリンやピアノに親しみ、その楽才を示していましたが、父親は家業を継がせるつもりでした。1884年、父親を説得して、資金を借り、フロリダでオレンジ栽培を始めます。これによって、彼は自由を手にし、果樹園の経営よりも作曲の勉強に精を出します。その時の、豊かな自然の中の孤独や農園の黒人労働者の音楽が、その後のディーリアスの芸術的成長に影響を与えたと言われます。彼の作品は当初、主にドイツで演奏されていて、本国イギリスではほとんど知られていなかったところ、1907年にロンドンで指揮者トーマス・ビーチャムと出会い、彼の擁護で、イギリスでも盛んに取り上げられるようになりました。今回演奏する「小管弦楽のための二つの小品」は、自分の作品があまりイギリスで演奏されないことを嘆いていたディーリアスが、「イギリスでは優れたアマチュア・オーケストラが多いのだから、小編成のものを書いたほうが受け入れられるのではないですか？」というオーストラリア出身の作曲家グレインジャーの勧めによって書き上げたものです。揺らぐような和音進行の上に、繊細な情景描写がなされるディーリアスの特徴がよく表れた作品です。

協奏交響曲（サンフォニー・コンセルタント）とは、いかなるものでしょう。18世紀後半から19世紀始めにかけて流行した、複数の独奏楽器をもつ、交響曲と協奏曲の中間的な形態、とされますが、交響曲としての性格はあまり前面には出てきません。バロック時代の合奏協奏曲と形態的には似ていますが、独奏群と合奏との対比という合奏協奏曲の性格よりも、独奏群主体、独奏者中心の協奏曲としての性格が強いようです。モーツァルト（1756・1・27～1791・12・5）の「協奏交響曲」は、今夜演奏する、ヴァイオリンとヴィオラを独奏とするものと、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルンを独奏楽器とする、二つの作品が知られています。このうち、管楽器を独奏群とするものは、モーツァルトの真作か疑わしい点があります。1778年4月5日パリからの父宛ての手紙で、フルート、オーボエ、ファゴット、ホルンを独奏群とする協奏交響曲の作曲を述べていますが、この作品は散逸しています。本日演奏する、ヴァイオリンとヴィオラを独奏群とする作品は、演奏される機会も多く、特に抒情的な第2楽章は、とても人気が高いです。

メンデルスゾーン（1809・2・3～1847・11・4）が、モーツァルト同様、早熟早世の天才音楽家であることはよく知られています。1829年7月30日の書簡で、「ここでは、あらゆるものが靄の中に霞んでいます。日曜の朝、教会から出て行く紳士たちは手に手にバグパイプを携え、スコットランド特有の衣服に身を包み、これまた盛装の婦人を連れ添い、いかにも誇らしげです。人々は草生す古城の辺りを声もなく歩んで行きます。今日、“スコットランド交響曲”の構想が、私の中に浮かびました。」と、スコットランド、エディンバラ、古城ホリールートゥ城の印象を述べています。しかし、速筆のメンデルスゾーンとしては大変珍しく、完成は1842年1月になりました。その10年以上の間、彼は機会ある度にイギリスへ渡り、この交響曲の推敲を重ねたようです。それだけに、この「スコットランド交響曲」は、同地の風物、環境、歴史と伝説、そしてそれらと作曲者との多様な深いつながりの産物と言えましょう。